オープンカレッジ

竹資源のあり方考える

竹を使用した建築化照明

椙山女学園大学生活科学部
生活環境デザイン学科教授
滝本　成人

たきもと・なりひと　工業デザイン。名古屋工業大学大学院博士後期課程社会工学専攻修了。博士（工学）。

昨年、本学の非常勤講師にお招きしたカトリーヌ氏（インテリア設計士協会会長）から、大変興味深いインテリア写真を拝見した。竹を使用した建築化照明で、竹を縦割りにして、竹の節がそのまま照明の構造と意匠を兼ね備えている。一見ランダムに見えるが、節のある竹と、竹と竹の間隔が交互に連続しリズム感があり、照明デザインとしてとても新鮮に見えた（写真）。

竹の生息域は日本・中国・インドなどのアジア諸国と、アフリカと南米に限られる。つまりヨーロッパ諸国とアメリカ大陸には、竹が生息していない。1933年に商工省工芸指導所の嘱託として招かれたドイツ人のブルーノ・タウト（1880～1938）は、日本の竹に興味を抱き、竹製の照明器具や、タケノコの皮で編み込んだパントレーなどの試作を残している。また、タウトは桂離宮を絶賛しているが、そこには竹を使った室内装飾が、ヨーロッパの建築とは全く異なる材料への審美眼に心打たれたことが想像できる。タウトの助手を務めた剣持勇（1912～71）は、椅子の座面や背もたれに、割り竹の弾力性を生かした作品を発表しているが、量産化には至らなかった。

カトリーヌ氏が設計した竹の照明空間

わが国は古くから、室内装飾や日用品から工芸品に、竹資源を活用してきた。とりわけ茶道の領域では、「わびさび」の美意識と「竹」が結びつき、今日まで優れた伝統産業が残っている。例えば茶筅（ちゃせん）のデザインは、材料特性と繊細な加工技術が結びついた傑作と言える。一方、プラスチックの成形技術の発展とともに、竹の消費量は減少に転じ、各地で竹やぶの拡大が見られる。名古屋市東部の猪高緑地では、竹やぶが37年間で4倍になった記録がある。

竹は病虫害に弱いと言われるが、囲炉裏（いろり）の煙で燻（いぶ）された煤竹（すすたけ）は、200年以上使用されている。これを人工的に開発したのが、乾留技術（5気圧・150度で20～30分加熱）で、これによって病虫害が克服できた。環境問題や脱プラスチックの視点でも、竹資源の有効活用が期待される。これは竹の生息域であるわが国の、建築・インテリア・プロダクトに関わる設計者の大きな課題と言ってもよい。

冒頭のカトリーヌ氏に、竹の活用についてお尋ねした。「わが家が手入れを悩ます竹やぶを所有することから、竹の活用法に関心があった。材料として利用するとともに、他の自然素材には見られない特徴的な形状を、インテリアで生かしてきた。次は欄間（らんま）・建具で、竹の良さを引き出したいと思っている」―。氏の今後の設計活動に、期待を膨らませている。